# SF

1969・10 no.7

資料『分解された男』

MY OPINION 学生運動について

土星シリーズ①

「土星のプリンセス」(連載第2回)

# 読書会

## 『分解された男』

のためのささやかな資料とお知らせ

読書会企画部

〃序〃

今回は 合宿後初の読書会であり、六号で書きましたように 不振を脱するための新しい考えかたによる第一回目の読書会でもあります。会員諸氏の 積極的な参加を望みます。

〃分解された男 あらすじ〃

時は二四世紀。一大産業王国の樹立を計るベン・ライクは、宿命のライバル、ド・コートニーに破産寸前にまで追いつめられた。彼はこの危機を脱するために殺人という非常手段に訴えた。――そして、この頃から殺は〃顔のない男〃のために毎夜うなされ始めた。

一方 人類の進化はエスパーと称する、特異能力を持つ人類を生み出していた。彼らは、普通人との和を保つためエスパー連合という組織をつくっていた。この連合の評議員でもあり〃ニューヨーク警察本部の刑事部長でもあるリンカン・パウエルはド・コートニー殺人事件の捜査にのりだした。――ここに、殺人現場の唯一の目撃者であるバーバラ・ド・コートニーをめぐって、エスパーと 巨大な権力と富を有するベン・ライクとの間に 虚々実々の攻防戦が展開する。事件はライクに有利に展開し、警察陣の敗退となるかにみえた。が エスパー連合は最後の手段〃集団テレパシー集中発現〃を用い、ついにライクを〃分解〃におくりこむ。

〃極簡単な話の説明〃

顔のない男〃ライクとド・コートニーの真の関係（親子）のシンボル。顔がない、ということはライクが実体をみとめたがらないため。父殺しを思い立った時に、ライクの良心がこの男を使って、ライク自身に罪を与えようとした。

分解〃意識、精神パターンを完全に破壊し、幼児期から再教育すること。

集団テレパシー集中発現〃一人のエスパーが、他の大勢のエスパーの潜在エネルギーを借りてそれを増幅エネルギーにかえて使う

# My Opinion

## About "学生運動"

by 一本杉権助

私は昨今の状勢を考えるに、これを明治時代の改革期と比べ、"昭和一進"と密かに呼んでいる。一進は、一歩の前進である。しかし、前進となるか否かは、今後による所大のようだ。

私としては問題を一大学内に止めるつもりはさらさらないので、社会全般の体勢として見てみたい。

話は一変してしまうようだが、後につながりをつけるから我慢してもらいたい。

「天皇から賜与される憲法なるものは、はたして玉であるか、瓦であるか。まだその実体を見ずして、先ずその名に酔う。我が国民の愚にして狂なる、何ぞかくの如くなるや」

これは、明治憲法発布に際しての中江兆民の言である。しかし、中江に、この言を吐く資格が果してあるのだろうか？

中江等はなるほど民権論者ではあったかもしれない。しかし、主張はしてもその意が政策上に取り上げられなければ、少くとも、その主張が政策上に影響を与えなければ、彼等は、無為無策のまま安意に活きている大衆と少しの差が見られないのではあるまいか。い

や、かえって、彼等が演説している時、何らかの形で人にけがをさせたりしたとしたら、沈黙の内にいる人達よりも他の人々にとって危険な存在になるのは事実でないだろうか。いわんや、保身のために赤の他人を盾にとったり、人の所有物を破壊したりした時はなを……である。

では、現実にどこに彼等のまちがいだと思われる点があろうか。第一に言及されることは、彼等は遠くから官憲の否をはやしたてたにすぎなかったと思われることであろう。彼等は、良く理解出来ていない民衆を煽動しただけにすんだのではなかろうか。なるほど一部の人々は彼等の言分を理解しただろう。しかし、それは極一部の人々にすぎなかった。——それも、そのようなことは言われなくても理解出来ていた人が大部分をしめていただろう。——それによって、結果は先に触れた様に、無為無策で居たのと差が表われなかったとしても不思議はないだろう。彼等としてはまず、「自由」とか「権利」という語を民衆論者の間の用語に止めておかず、人民の間に浸透させるべきではなかっただろうか。

第二に、彼等は下野した人々であったとは言え、まだまだ、人民の間から浮き上った存在だったと思われる。そしてこのことが、民衆が彼等を理解し得なかった根本原因の様に思われる。

そこで、現在の学生運動とのつながりだが、そのまま、憲法という語を現在の諸政策に、民権論者を学生におきかえればいいのではなかろうか。

学生も民権論者と同様に、学生というカラの内にとじこもろうとする。そして国民の間から浮き上ろうとする。事実、偶然、学生が、国民の立場から発言しようとすると、一学生としての態度を忘れている、と言うし、故意に難解な語句を使おうとする。これでは、明治時代の民衆の内に「憲法の発布」を、お上が「絹布の法被」を下さるのだと思って、ありがたがったり、不思議がったりしたのと同じような結果しかもたらさないのではないだろうか。

何故、我々学生は行動にうつさなければならないのか？——→政策（現体制）に反対だからだ。つまり政策の変更が欲しいから。——→それには一部の人の意見ではだめだ。——→世間に対し、アピールする。——アピールのための運動すれば、学生運動ということで弾圧される。——→故に、官憲に対して反撃する。——ここからはイタチごっこである。

私は、このアピールという態度に問題があるのではないかと思う。ここですでに国民の層との間にひらきがあるように思われる。私達学生が今なすべきことは、今一度国民の間に帰って、大学立法とは何か、自衛隊と

〈土星シリーズ〉①

# 土星のプリンセス

司修一

## 3

支局長室のソファで彼は大急ぎでケースの中の書類に目を通していた。彼、ジョン"カッター"は、地球新聞社（テラ・タイムズ）辺境地区土星支局員リー"東郷"、本日付でN・W（ワシントン）支局勤務を命ぜられた社会部員、ということになっていた。前任地はN・L（ロスアンジェルス）。――それで救助艇の中でとっさにN・Lなんて地名が出てきたのか。潜在意識は、この地名をおぼえていたんだナ。――カッターは、東郷についての書類に目を移した。ものすごいスピードで読み始める。

リー"東郷"についての資料

日系英人　男　三四才

二四〇一年　月　静かの海市生

父　東郷道行

母　スージイ"東郷"

二三九二年結婚

東郷道行　星間航路第一種機関士

二四一三年　土星革命の乱の折、N・W（ワシントン）港で革命軍のために"ヴァーゴ皿号"とともに爆死。

スージイ"東郷"　地球英国ロンドンに在住

二四〇五年　地球日本国札幌に転居（父の転勤による）

二四二九年　学業終了（報道心理学）　学歴省略

地球新聞社入社　社会部

二四三一年　土星支局N・L（ロスアンジェルス）班配属（本人の希望）

二四三二年　結婚　配偶者ローズ"シェリアン

二四三三年　離婚　子供ナシ

二四三五年　N・W（ワシントン）班転属（本人の希望）

※　妹　ユーリ　二四二八年より行方不明

最終確認地　土星　N・L

当時　二〇才

と、一応読み終えた時、支局長（もっともここでは皆、社長と呼んでいる）がはいってきた。――N・L（ロス）勤務も、N・W（ワシントン）転属も本人の希望からか。そして行方不明の妹の最

終確認地がN・L、――ひっかかるな。

支局長は変にむずかしい顔をしていた。深々とソファにすわると 斜めにこちらをみた。

「心配したよ。到着予定時刻はとっくに過ぎていたのに連絡さえもはいってこないんだからな。――ヤツラのいやがらせかと思ったんだがまさか間い合わせるわけにもいかんしな。――フフ、救助隊の連中もびっくりしたろうな、N・Lからきた新聞記者を拾ったんだからな。」

支局長は低い声でボソボソとつぶやいた。――こうして話しているところを見ると、俺の外見は東郷になっているらしい。整形したんだな――。

「ところで、ユーリは見つかったのかね。――フム、だめだったようだな。――まあ、君には悪いかも知れんが、私はそれでいいんだと思う。ユーリは失踪した時、二〇才だった。もうりっぱな大人だ。その大人が行方をくらますにはそれなりの理由があったはずだ。たとえ 見つかったとしても どうすることもできんだろう。いやそれよりも見つかるかどうか疑問だ。七年前の事だろう? 一年ひと昔ともいう。まあ、無理だな。警察に依来しても、最近は発見できるケースは稀だ。――あきらめろといっても無理かもしれんが。」

「ハイ、もういいんです。あきらめることにしました。」

――そうか、東郷は 妹を捜すためにN・L勤務を申し出たのか。

「そうか。よろしい。――実は私が君をN・Lに配属したのは 君個人の希望によるものだけじゃなかったのだよ。あそこは、君も 行ってすぐわかっただろうが 太陽系唯一の無政府都市だ。君にとって、ずい分ためになるだろうと思って、本社から新入社員の連絡があった時から考えていたことなんだ。」

――無政府都市? そうか、俺が退役したころ、そんなうわさをきいたことがあったっけな。

「疲れたろう。今日はゆっくり休みたまえ。勤務は明日からだ。――三日後に、N・Lの報告書をもってきたまえ。わかったね。――それじゃ今日はこれまでだ。」

「ハイ 社長。」

「私は 支局長だよ。」

ニヤリと笑って支局長は席をたった。

――以下次号

## ☆松本氏、SF研を去る。

TERRAの編集局長でもあり、又一・二年生には良き先輩でもあった松本博氏は、10月12日、退部の意向を明らかにしました。理由は、SFがきらいになってしまい、最早好きになれそうもないから、とのことでした。月日に、新編集局長井沢誠一郎氏に事務のとり次ぎが行われました。おしい人材を失ってしまいました。

## ☆おことわり

本号に掲載致しました"MY OPINION 学生運動について"のことですが、はたしてこれが、SF研究会の機関誌にふさわしいか？という問題が出ると思います。一一当局は、『SF』は会員のための機関誌であるから会員の意見を（要請に応じて）のせるのは当然であろう、との見解により掲載することにしたのです。賛成・反対・其他、意見をまっています。原稿用紙にまとめた上で 北島編集長のところへ御提出下さい。枚数に制限はありません。

## ☆TERRA4号 原稿締切間近

FANZIN、TERRA第4号の締切は10月末です。提出意図のある方は早めに井沢編集長のところへ原稿をもってきて下さい。

### 編集後記

○ 北島氏が多忙のため、本号は、小生が主に編集等の仕事を致しました。（庄司）

○ 10月に二部でたわけですが、これは、6月号休刊の分、とでもお考え下さい。11月からは再び月刊になるはずです。

○ 共同研究の経過報告の掲載を考えています。御協力下さい。

SF 1969・10 NO7

昭和44年 10月26日 発行

編集長 北島利幸

発行者 SF研究会

印刷 北上印刷所

製本 相模製本所

# MSFC

MEIJI UNIV. SCIENCE FICTION CLUB